

生物科学学会連合 第8回定例会議 議事録

日時 : 2013年10月12日(土)14:00~16:00
場所 : 東京大学理学部 2号館 2階 223号室(東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学本郷キャンパス内)

出席 :

運営委員

浅島 誠 (生科連 2013-2014 代表・国際生物学オリンピック日本委員会[JBO]委員長)
長濱 嘉孝 宮島 篤 入江 賢児

団体代表 (加盟団体)

長井 孝紀 (日本味と匂学会)	岩崎 博史 (日本遺伝学会)
大西 武雄 (日本宇宙生物科学学会)	仲嶋 一範* (日本解剖学会)
大野 博司 (日本細胞生物学会)	海老原史樹文 (日本時間生物学会)
八神 健一 (日本実験動物学会)	加藤美砂子 (日本植物学会)
石田健一郎 (日本進化学会)	仲嶋 一範* (日本神経化学学会)
和田 圭司 (日本神経科学学会)	遠藤 玉夫 (日本生化学会)
大手 信人 (日本生態学会)	都築 功 (日本生物教育学会)
石島 秋彦 (日本生物物理学会)	小西 真人 (日本生理学会)
中村 春木 (日本蛋白質科学学会)	武田 洋幸* (日本動物学会)
武田 洋幸* (日本発生生物学会)	木下 充代 (日本比較生理生化学会)
竹井 祥郎 (日本比較内分泌学会)	妹尾 啓史 (日本微生物生態学会)
本間美和子 (日本分子生物学会)	村上 哲明 (日本分類学会連合)
樗木 俊聡 (日本免疫学会)	

(計 25 団体)

団体代表 (オブザーバー団体)

渡邊 秀典 (日本農芸化学会)

(計 1 団体)

オブザーバー

武田 洋幸* (IUBS 日本代表委員)

(計 1 名)

欠席 : 個体群生態学会 日本植物生理学会 日本薬理学会

(計 3 団体)

(加盟合計 28 団体)

事務局 中西 秀彦 村田 英樹

(敬称略、団体名 50 音順)

議題・報告 :

1. 前回議事録の承認

前回定例会議の議事録案が確認され、異議なく承認された。

2. IUBS(国際生物学連合)について

武田 IUBS 日本代表委員より、災害時における被害を調査・想定する国際

ワークショップを 12 月に開催する準備を進めており、詳細については今後生科連にも情報提供していくとの報告がなされた。

3. IBO・JBO(国際生物学オリンピック)について

日本生物教育学会の都築功氏より、資料に基づき第 24 回国際生物学オリンピックスイス大会での日本代表の成績について金メダル 1 名、銀メダル 3 名であり、今回は公立高校の生徒の受賞が目立ったとの報告がなされた。

また、日本生物学オリンピック 2013 の申込状況について報告がなされ、県によって参加者数のばらつきがあることなどが説明された。

次回の国際生物学オリンピックはインドネシアで開催予定であり、日本代表の選抜は 2014 年 3 月に行う予定であることが併せて報告された。

4. 平成 24 年度会計監査報告

事務局より、第 6 回定例会議で承認された平成 24 年度会計報告について、6 月 18 日に石浦章一、松木則夫両会計監査委員による会計監査が行われ、監査の結果、正確妥当なものであるとの監査証明書を受領したとの報告がなされ、改めて平成 24 年度会計報告が承認された。

5. 生科連の今後について

浅島代表より、明年は執行部の改選時期であるとの説明がなされ、配布資料に基づき代表選出方法等について確認がなされた。

6. 教科書問題検討委員会の開催について

浅島代表より、前回の定例会議開催後に推薦された委員候補者について推薦がなされ、異議なく承認された。また、日本比較内分泌学会から新たに竹井祥郎氏が推薦され、異議なく承認された。

引き続き浅島代表より、現状の高校教科書によって用いられている用語が異なるものがあり、使用する教科書によって生徒の理解度に差異が生じるなどの問題点などについて説明がなされ、今後委員会の活動のテーマを「用語の統一」としたいとの提案がなされ、異議なく承認された。

また、日本生物教育学会を幹事学会として今後の委員会活動を行うことが承認され、日本生物教育学会の米澤義彦会長に加え、鳩貝太郎副会長ならび都築功副会長も含めて調整していくことが確認された。

7. ポスドク問題検討ワーキンググループについて

浅島代表より、前回の定例会議にてポスドク問題検討ワーキンググループの委員案として、近藤孝男氏(日本時間生物学会)、曾我部正博氏(日本生物物理学会)、町田泰則氏(日本植物生理学会)の 3 名が推薦されたとの報告がなされ、承認された。

引き続き浅島代表より、明年に最先端研究開発支援プログラム(FIRST プログラム)や最先端・次世代研究開発支援プログラム(NEXT プログラム)が終了する見通しであることから、今後ポスドクが急増する可能性があり、今から対策を検討する必要があるが、なかなか効果的な解決策がなく深刻な状況であるとの認識が示された。これらに対し日本動物学会や日本分子生物学会の

取り組みが紹介された。

その後浅島代表より、ポスドク問題に対して多くの学協会の協力が必要であるとの観点から、前記の 3 名の委員に加えて、改めて各加盟団体から委員を推薦してもらうことが提案され、了承された。

引き続き宮島副代表より、これから大学のポストが減少するうえに大学院生が増加することが予想され、もはや就職の斡旋ということでは解決が望めず、構造的な変革が必要であり、現状は非常に深刻な状況であるとの見通しが示された。

8. 日本版 NIH 構想のその後について

浅島代表より、6 月 11 日に発表された緊急声明について、科研費削減に関する懸念の表明は効果があったとの報告がなされた。各学協会がまとまって具体的な方策を提言すれば政府に対しても大きな影響力があるので、引き続き事態を注視し、必要に応じて意見を述べていくことが重要であるとの認識が示された。

また、これに関連して宮島副代表より、日本生化学会で開催されたシンポジウムの内容について紹介がなされた。

9. 科研費不正行為の防止について

浅島代表より、平成 26 年度に予定されている科研費事業の概要について説明がなされた。このうち科研費の適正な使用について、採択された場合にこれまで責任の所在が機関長にあったものが、今後は機関長に加えて採択された個人にも及ぶことなどが紹介され、これからは共同研究者などもすべて管理する必要が生じることになるとの認識が示され、充分注意して欲しいとの意見が述べられた。

また、科研費を使用する際の不正行為の防止について、日本分子生物学会、日本生化学会の取り組みなどが紹介され、不正行為を防止するために、例えばホームページに注意喚起の情報を掲載するなど、学協会として不正防止の注意喚起を行う姿勢を示すことが重要になるとの説明がなされた。

10. ジャーナル誌について

浅島代表より、日本学術会議学術誌問題検討分科会の活動について、学協会に対してアンケート調査を行い、現在その結果を解析中との説明がなされた。また、海外出版社がジャーナルの発行を代行していて、この状態は一見国際化のように感じるが、採算が合わなくなるとすぐに手を引いてしまうという例などが紹介され、インパクトファクターの低下が国内学会誌の空洞化を招く恐れもあり、学協会が自主的に国内において国際情報発信力があるジャーナルを発行していくことの重要性が述べられた。

11. 日本学術会議の大型施設の計画とその後について

浅島代表より、従来から国立自然史博物館の設立が模索されていたが、東日本大震災により貴重な生物標本が失われたことから、日本学術会議において大規模マスタープランの一環として「自然史博物館構想」がまとめられているとの報告があり、これまでの経緯ならびに進捗状況について説明がなされ

た。

引き続き長濱副代表より、日本学術会議からは正式な情報は出ていないが、自然史学会連合や分類学会連合、日本学術会議の動物科学分科会、自然史古生物学分科会、自然史標本の文化財化分科会などのサポートを受けて、自然史博物館の設立に向けて活動しており、さらに今夏、「国立自然史博物館を推進する会」を立ち上げて活動を開始したことなどが報告され、生科連に対して協力依頼がなされた。審議の結果、国立自然史博物館の設立に向けた活動の推進について、生科連として協力することが承認された。

また浅島代表より、国立科学博物館とは棲み分けを行い、互いに協力していくことなどが確認されているとの補足発言がなされた。

浅島代表より、次回の定例会議開催日について、2014年2月15日(土)に開催する旨提案がなされ了承された。時間は14:00~16:00、会場は東京大学理学部2号館2階223号室とすることが確認された。

以上